

私の履歴書

前橋 汀子

③

私は神経質で手のかかる子供だったらしい。少しでも布団やシーツが曲がっていたりすると泣き叫び、なかなか寝ようとしなかったそう。

に言われたのだが、私は苦笑いするしかなかった。私が小学3年生になるまで一家は東京都練馬区桜台に住んでいた。当時「十三間道路」と呼んでいた現在の目白通りで、私は自転車の練習に励んだ。今は車がびゅんびゅん行き交う大通りだが、終戦から数年の当時は、そんな悠長なこともできなかった。

園幼児生活団に入ったのがきたのだらう。まさに運命の分かれ道だった。近所の幼稚園ではなく、自由学園に決めたのは母の一存らしい。日本初の女性ジャーナリスト、羽仁もと子さんの「生活即教育」という理念に共鳴し、羽仁さんが創立した自由学園に娘を入れたかったのだそう。

時間も組み込まれている。私は子供心に、世の子どもたちはこの時間、私と同じように一生懸命バイオリン

幼い頃

一方、2歳下の妹の由子はおおらかに育った。わがままな姉の振る舞いを見て、自分はいくらでも悟ったの由子はおおらかに育った。わがままな姉の振る舞いを見て、自分はいくらでも悟った

「みんなと一緒に」が苦手

4歳で始めたバイオリン

遠足も嫌、運動会はもっと嫌。臨海学校や林間学校など何かと理由をつけてほとんど行かなかった。みんなで何かを一緒にやるということが本当に嫌だったのだ。

後に当時の級友たちが私のコンサートに来てくれたときに「前橋さんが校庭で遊ばなかったのは、バイオリンを弾く手をかばっていたんでしょ。大変だったわね」と口々に

学校の休み時間になると、みんなが校庭に飛び出してド

園幼児生活団に入ったのがきたのだらう。まさに運命の分かれ道だった。近所の幼稚園ではなく、自由学園に決めたのは母の一存らしい。日本初の女性ジャーナリスト、羽仁もと子さんの「生活即教育」という理念に共鳴し、羽仁さんが創立した自由学園に娘を入れたかったのだそう。

園幼児生活団に入ったのがきたのだらう。まさに運命の分かれ道だった。近所の幼稚園ではなく、自由学園に決めたのは母の一存らしい。日本初の女性ジャーナリスト、羽仁もと子さんの「生活即教育」という理念に共鳴し、羽仁さんが創立した自由学園に娘を入れたかったのだそう。



子ちゃんのケースを抱えて

命バイオリン

幼児生活団では情操教育の一環として、ピアノかバイオリンが必修になっていた。ある日、母が小さな子供用のバイオリンを買ってきた。理由は「こっちの方が安かったか」。母はバイオリンに丸印をつけて書類を提出した。もしこれがピアノだったら、私の人生はどうなっていたか。バイオリニスト